

尾瀬湿原のあれこれ

泥炭は、低い気温や過剰な水分などの条件により、枯死した植生が完全に腐敗するのを妨げられ、有機物質が残されて作られます。尾瀬の年間平均気温は 4℃と冷蔵庫の中とほぼ同じで、腐敗を抑制するのに十分な寒さです。

部分的に腐敗した物質が堆積し、何千年もかけて凝縮すると、やがて泥炭土に変わります。尾瀬の泥炭が発達するペースは、植物の種類や天候によっても変わりますが、1年に約 0.7～0.8 ミリです。もし訪れた人が木道から降りて泥炭土に 1 センチのくぼみを作ると、湿原が元通りに回復するまで 10 年かかります。研究者たちは、高原の泥炭表層が現在の 5メートルの厚さになるのに、6,000～8,000 年かかったと考えています。

尾瀬ヶ原の湿地帯を覆う植物は、表層の下にある植生の構成と、どのようにその生育圏が形成されたかによって異なります。1,800 以上存在する池塘の大きさは直径 2メートルから 100メートル以上、深さも数十センチから 3メートル以上と様々です。

尾瀬ヶ原の湿地帯の大部分は、くり返し起こった洪水の結果です。川から氾濫した水が引くたび、高い土手で区切られて川の両側に湿地帯が残されました（図参照）。これらの湿地帯は、ヨシや、芝に似たスゲ、ミツガシワ (*Menyanthes trifoliata*) などの植物にとって理想的な生育域です。これらの植物が部分的に腐敗して泥炭を作り、くぼみを埋めて高原の平らな表面を作り出しています。

尾瀬沼の近くの湿地帯は、もともとは池塘だったものが、沿岸の浸食につれて徐々に土砂で埋まって湿地になるという異なる過程を経て発達しました。この過程は水生植物の盛んに生育する環境を作り出し、やがてその植物も腐敗して泥炭に変わりました。この種類の湿地帯は、たいてい地表面が周囲の地下水面と同じ高さであるため、「低層湿原」と呼ばれます。泥炭が川の水から受け取る栄養分は、尾瀬沼に育つミズバショウ (Asian skunk cabbage) にとってなくてはならないものです。